

82

渋沢榮一の第三回パリ万博参加体験と 明治前期の福祉・医療事業への関与について

稲松 孝思, 松下 正明

東京都健康長寿医療センター

渋沢榮一は日本型資本主義の父とも見なされる経済人であるが、明治中期までの若い頃から様々な社会事業に関与しており、その公益への貢献が評価されている。関与した公益事業は、福祉医療関係、教育事業など広範にわたるが、このうち明治期中期までの福祉・医療事業への関与について、個々の事業におけるパリ万博参加体験との関係を検討した。

渋沢篤太夫(榮一)は埼玉の農民であったが、縁あって一橋家に仕官、慶喜が第15代将軍になると共に、幕臣となった。フランスのナポレオン3世の要請で、幕府は徳川昭武を将軍名代とする使節団を送り、渋沢は勘定格陸軍附調役として会計・庶務を担当した。この使節団には御番格奥詰医師として高松凌雲、駐日イギリス公使館付通訳としてアレクサンダー・シーボルト、また、佐賀藩からは佐野常民が参加している。また、渋沢が徳川慶喜に帰国報告を行ったとき、中老・大久保一翁に会計報告をしている。明治中期までの渋沢の若い頃の社会福祉への関与には、この時の人間関係が基礎になっている。

東京府知事となった大久保一翁は、江戸幕府開明派の西洋医学導入方針を引き継いで、救貧施設『養育院』と西洋式病院『東京府病院』を、明治5-6年に創設している。大久保と渋沢の初めての出会いは、大久保が静岡藩の中老の時、20歳年下の渋沢からヨーロッパ使節団の緻密な会計報告を聞いた時であろう。その後、静岡藩に割り当てられた太政官札の運用を渋沢に託し、渋沢は商法会所・常平倉の運用を成功させている。明治4-5年、渋沢は、大蔵省租税正・改正掛として、政府の税制、国際金融などに関与し、新東京のインフラ整備、銀座大火事後の煉瓦街化、街灯設置、銀行設立などに巨額の七分積金を利用することに関心を持っていた。明治7年、大久保府知事が共有金(七分積金)取り締まりを明治7年に渋沢に託すとき、養育院と東京府病院についても託したと思われる。以来、養育院と東京府病院(土地・建物は慈恵医大が継承)の運営に、渋沢は特別に貢献し続けている。

アンリ・デュナンは、国際赤十字運動を立ち上げ、パリ万博においてパビリオンを出して国際社会にデビューさせている。佐賀藩の佐野常民は、これを見たことが、後に日本赤十字運動を立ち上げた大きな動機になったと述べている。また、高松凌雲にとって、このパビリオン見学と、パリの病院・救貧院における体験は、帰国後の函館病院における、赤十字思想の実行に大きく影響を与えている。その後、高松は、野にあって貧民救済の為の同愛社を運営しているが、渋沢はその応援を続けている。A.シーボルトは、日本におけるその後の万博出品の設営に働く佐野に、弟を来日させて協力している。また、後に日本政府の不平等条約の改定に奔走する外務大臣・青木周蔵の手足となって、ヨーロッパにおける日本政府の一員として働き、その間にジュネーブ条約の締結に貢献している。この間、渋沢は種々の形で赤十字運動に関係している。このように、渋沢が関与した福祉医療事業は、パリ・ヨーロッパ滞在中の渋沢自身の体験や、人脈が関与する例が多い。